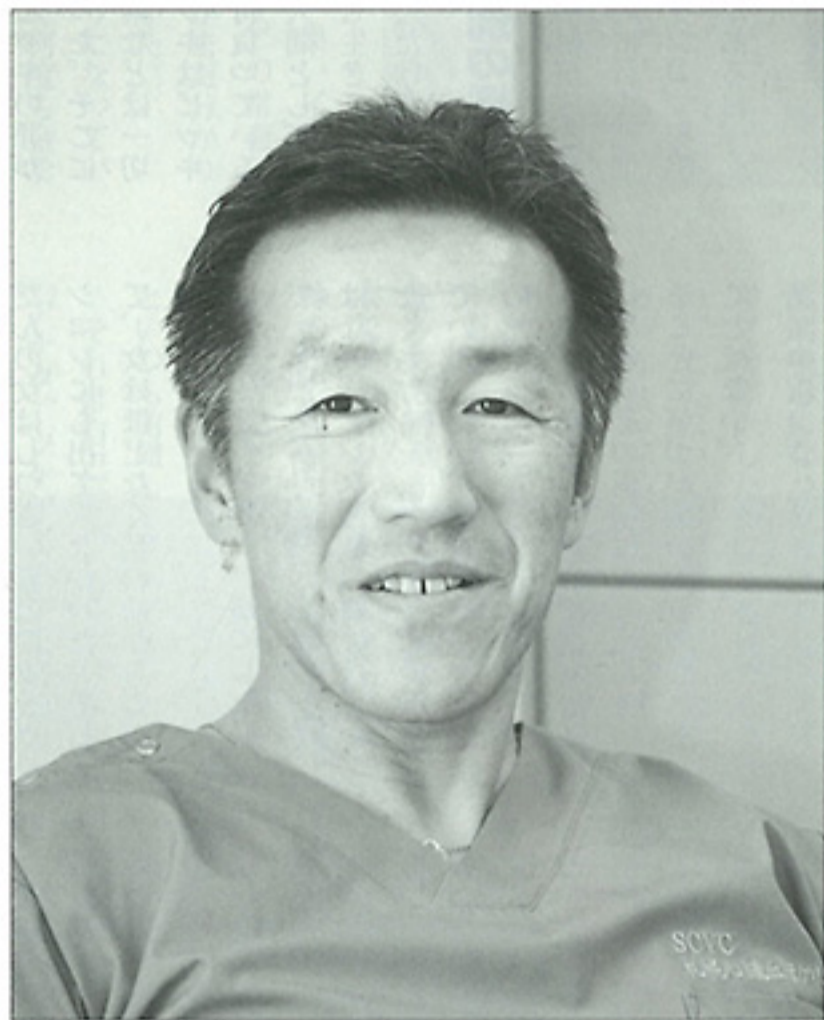


妥協することなく、自分が正しいと 思うことに邁進する。それがすべて

Interview

札幌心臓血管クリニック
CEO 藤田 勉 氏

「医は仁術」といわれるように、医療は手術の力量や最新鋭の設備だけではなく、医師の倫理観や人柄も重要な要素だ。病気に ついて詳しい知識を持たない患者にとつて は、技術や設備云々よりも直接話をする医 師の人柄のほうが病院を選ぶうえで大切か もしれない。本稿では、最新鋭の検査機械 を備える「札幌心臓血管クリニック」(札幌市 東区)の開設者である藤田勉ドクターに注目 道内トップである同院の心臓カテーテル治 療件数ではなく、その実績を支える藤田ド クターの人生活と医療観に迫った。



ふじた・つとむ
昭和36年生まれ。61年旭川医科大学医学部卒。同年、札幌徳 洲会病院に勤務。平成元年、国立循環器病センター(大阪)を経て、 平成2年に札幌東徳洲会病院へ。循環器センター長兼院長代行 を務め、平成20年に札幌心臓血管クリニックを開院。日本循環 器学会認定専門医。日本内科学会認定総合内科専門医。日本救 急医学会認定救急科専門医。48歳

札幌市東区の「札幌心臓血管クリ ニック」は、一昨年の4月に開院し た。19床しかないクリニックであり ながら、狭心症や心筋梗塞の治療法 である心臓カテーテル治療(以下心 カテ)で、開院からわずか9カ月で 道内トップの症例数を達成し、昨年 は全国4位(道内トップ)にもなった。 わずか2年でその名が全国区となっ た同クリニックの開設者は道内で心 カテを最も多く手がけている藤田 勉氏。その技量と最先端の検査機械 の数々を一度でも目にすれば、道内 随一の症例数を達成できるだけの患 者が集まるのも当然のことのように 思われる。しかし、果たしてそれだ けで人が集まるのだろうか。

同クリニック成長の理由を探ろう と藤田ドクターの1日に密着した際、 1人の高齢患者が外来に現れた。腰 に手を当てて、痛みを顔にしかめな がら診察室に入ってくる。付き添う 家族は申し訳なさそうに言っていた。 「心臓じゃなくて、腰が痛いって言 うのにおねえ。先生じゃないとイヤ だって、おじいちゃんがきかないも のだから……」

藤田ドクターの外来には、胸が苦 しい、息切れするなどといった心臓

病が疑われる症状を訴える患者が大 半を占めるが、専門外と思われる患 者が訪れることも珍しいことではな い。どうやら患者らは、技術と設備 のみで同クリニックに足を運んでい るのではなく、藤田ドクターの人柄 や考えに共感していることも動機 のひとつのようだ。

ギター漬けの少年時代と 徳洲会との出会い

「ご出身は道内ですか? 藤田 さんはどんな子供だったんでしょ う。生まれは稚内で、父が道職員でし たからその後は転勤で道内の色んな 所で育ちました。ごく普通の子供で、 朝から晩まで外で遊んでばかりで勉 強はまったくしない子でした(笑)。 成績もずっと真ん中あたりの目立た ない子供だったと思います。でも、 小学5年生のときに登別へ引っ越し たのを機に勉強するようになりまし た」

なぜ急に?

「僕は長男で、妹が1人いるんです けど、妹は頭の良い子だったから勉 強しなくても成績が良かったんです ね。僕は努力しないとダメなタイプ だったようで(笑)。さすがに両親も

心配したのか、「勉強しなさい!」と 言うようになりました。おかげで中 学の頃には成績が学年のトップに なってしまいましたから、親に感謝す ね。その勢いで高校は南館ラ・サー ル高校に進みました」

部活動は?

「特にしてなくて、中学生の頃は 勉強しているか、ギターを弾いてい るかの生活で、学校祭で友達と演奏 したりしてましたね」

最初に弾けるようになった曲 は何でしたか?

「井上陽水の『東へ西へ』。最初は フォークから始めて少しずつロック にのめり込んでいって、高校の頃は ロック研究会に入っていました。一番 影響を受けたのはディープ・パープ ルで、毎日毎日6時間くらいギター を弾いてましたね。自分で言うのも おかしいけれど、ものすごく上手な 高校生だったと思います。ちょうど ヴァン・ヘイレンが流行って、速弾 きもしてましたし、かなりマニアッ クなアーティストも弾いてました」

今はもう演奏しないのです か?

「全然。旭川医大でジャズ研究会を クビになってからギターに触って

ませんから、もう弾けないでしょう ね。ジャズ研究会なのにロックをや り過ぎて『方向性が違う』って辞めさ せられちゃったんです(笑)。でも、 ギターを毎日飽きずにやっていたこ とが今になって活かしています。手術 の際に、5本の指が独立して器用に 動くというのは、やはり音楽をやっ ていたからです」

「ギター漬けの高校時代ですが、 進路を旭川医大に定めたきっかけは 、「北大理工学部に入って一級建築士 になる、というのが漠然とした夢と いうか僕のプランでした。でも、高 校のときに成績が伸びてきて先生が 『医学部も入れるんじゃないか』って 話してくれたんです。それを聞き取 りました。試験を受けたら旭川医大に 入っちゃった(笑)。だから僕はそも そも医者になりたくて医大に進んだ わけじゃないんです。大学時代は ジャズ研を退部した後は勉強ばかり していました。それでも漠然と医 者になるんだという程度にしか思っ ています。でも、大学4年 生のときに徳洲会の徳田虎雄理事長 が旭川に来て講演会を開いたんです。 その熱い語りを聞いて、人生が変わ りました。『これだ!』と思いました」



開院時は1つだったカテーテル室も現在は2室に

ね。 — たった一度の講演が転機と なった。

「僕はすごく単純だから(笑)。徳田 理事長は幼い頃の話をされてね、夜中に弟さんが急に熱を出して、助 けてもらおうと医者を訪ねたんです が、貧乏だったので医者が往診に來 てくれなかったんです。そのため に弟さんはじくなってしまう。この出 来事をきっかけに理事長は医者にな って、どんなに貧乏でも公平に、 いつでも、どこでも、誰でも医者に 診てもらえる病院を作ろうと今は全 国を走り回っているんだと話されま した」

「生命だけは平等だ」の理念を全国に広げよう。

「医療の原点は救急医療だ」ということも強調されていました。当時は医局制度というものがあって、学生のうちに自分の専門分野を決めなければならなかったんです。たとえば外科を選んだらそれ以外の内科系の病気を診られない医者になってしまふ。でも、徳洲会ではオーペン（研修医を指導する医師）の指導の下で卒業間もない若手に救急医療を担当させて、総合的な診断と治療ができる医者を育てようという徹底したトレーニングが行なわれていたんです。昼も夜もなく救急に対応するのはシンドイ、でも運ばれてくる患者さんほもつと苦しいし命がかかっている。苦しんでいる人を救うのが医者の本分だから24時間対応は医療の基本だと。それができるようにするために専門ばかりではなく身体を一通り診られる医者にならなくてはいけないと熱く訴える徳田理事長のエネルギーにすつかり僕は「罹患してしまっていますね。卒業後は医局にも入らないで迷わず、開院して2年の札幌徳洲会病院（札幌市白石区）で働くことにしました」

——専門を問わずとにかく患者優先、24時間対応という現在の藤田先生の治療方針は、その頃に形作られたんですね。

「大学を卒業する頃には信念としてすつかり出来上がってて、今もまったく変わりません」

救急へのこだわりは医療へのこだわり

大学卒業後の3年間は札幌徳洲会病院で昼夜を問わず多くの救急患者に対応した藤田ドクター。事故や急病で生命の危機に直面した患者を救う日々、医師という仕事のやりがいや強烈に感じたという。医師になって4年目の平成元年、国立循環器病センター（大阪府）で心カテを1年間研修した後は、札幌市白石区の札幌徳洲会病院には戻らず東区にある札幌東徳洲会病院で勤務し始める。

——なぜ札幌東徳洲会病院の方へ異動されたんですか。

「僕が大阪に行っている間に、心カテの分野で道内では最も有名だった舟山直樹先生（故人）が札幌東徳洲会病院に勤務することになったんです。それでわがままを言って、舟山先生の下で勉強をさせてもらえるよう異

動しました。ただ、最初の頃はかなり大変でした」

——舟山先生の指導が相当厳しかった。

「いえいえ、先生はとても大らかな方でした。大変だったというのは当時の札幌東徳洲会病院は医師不足、スタッフ不足もあって、外来も救急もなかなか患者さんが集まらなかったんです」

——今では北海道で最も数多く救急搬送を受け入れている民間病院なので想像できないですね。

「当直していても患者さんが一人も来ない日さえありました。当時の僕は、いつも札幌市の夜間急病センターに『心臓でも他の急病でも何かありましたら、いつでも私たちが診ますから送ってください』と電話していたんです。そのうち『こっちは忙しいのだから、毎日の電話は困る』と怒られてしまいましたね。シユンとしてしまったのを覚えています（笑）。でも、とにかくたくさん救急患者さんを受け入れて救いたいと思っていて、サイレンが聞こえたらいつでも『ウチに来ないかなあ』と思って当直していましたよ。でも、やるべきことをきちんとしていたら口コミだと

と思うのですが患者さんが徐々に増えていって、病院の組織も順調に大きくなっていきました。心カテの実施件数も統計が始まってからずつと道内1位となりましたが、いつの間にか患者さんとの距離が広がっていることに気が付いたんです。僕はもつと患者さんの人生を末永く責任を持つ仕事をしたかった。そして、重症の患者さんばかりを治療していたからこそ、予防の大切さを痛感していました。もつと地域に溶け込んで重症化する前に予防の必要性を啓蒙して健康面から社会に貢献したいと考えるようになっていたんです」

——そうして平成20年4月に独立・開院という運びになるのですか。

「僕は医局に入っていないんですけど、帰る所は徳洲会しかなかった。そこを飛び出して独立するわけですから、まさに背水の陣で臨んだクリニクのオープンでした。今のように入院した患者さんには申し訳ないんですけど、開院からしばらくは僕もスタッフもまさに死に物狂いでいた。僕も半年くらいはずつと泊まり込みでした（笑）。プレッシャーもありましたが、今は一人ひとりの患者さんに外来から治療まで一貫し



「何か不安なことがあればいつでもここに電話してくださいね」
藤田ドクターの携帯電話番号が入ったカードを10年以上も患者に配り続けている

て関わっていますから、医者としてのやりがいを取り戻したような気もしています」

——開院からわずか9カ月で道内トップの心カテ件数、昨年は全国でも4位でした。どうしてここまで実績を上げられたかと思っていますか。

「企業秘密です（笑）。というのは冗談で、それが誰にでも理解できるものであればみんながナンパーワンになれるはず。結果は派手に見えるかもしれませんが、1日1日を大切にしてコツコツと地道な努力を続けてきた結果だと思っています。患者さんに接するとき、一つひとつの動

作に気を配って何が大切なのかをスタッフみんなが考えて行動する。あとは、『できない』とか『無理』といったネガティブな発言はしないことですね」

——専門外の患者が来ても？

「ウチの専門じゃないから診れませんと突っぱねるのではなくて、まずは患者さんの訴えを聞いて、必要があれば専門病棟の先生に紹介状を書くべきです。患者さんは医療の専門家ではありませんから、病気が分からないのは当たり前。分からないことが不安なのでしょうから、説明して治療の道筋をつけることで不安

をしつかり取り除くことも医療者の仕事でしょう。それが患者本位の医療でもあると思うんです。ただし、患者本位と口にするのはとても簡単ですが、これを実践するとなると非常に難しいと思います。たとえば、24時間対応のために寝られないなど、必ず何らかの自己犠牲がないと患者本位の医療は成り立ちません。そして犠牲を職員に強いることはなお難しいものです。当院のスタッフはみんなずべては患者さんのためにという信念を持って僕について来てくれて、昼も夜も走り回ってくれています。僕は幸せ者です」

——かなり遅い時間でもスタッフが居て検査も可能ですね。

「専門外だから無理、時間外だからできないなどと言っていると、何も生まれないんですよ。『できない』と言う前にやってみる。どうしてもクリアできない問題があれば、みんな考えて解決していく。そうすることでスタッフ間に壁がなくなるし、患者さんにとっても良い結果が生まれると思います。以前、ある患者さんが胸が苦しくて他の病院に行ったところ、精密な検査は予定があつて飛び込みではできないと言われたん

です。心電図では問題ないからその日は検査の予約だけ入れてくださいと帰されたというんですね。その患者さんは不安になって夜でしたが当院にいられたのですが、検査をしたから心臓の血管が詰まっている心筋梗塞の状態でした。『できない』と簡単に言うことの怖さを感じましたよ」

——藤田先生は現在48歳。50代にしたいと考えていることは。

「今がすべてで、特にはないです。今まで通り妥協することなく、自分が正しいと思うことをやっていく。これに尽きます。そうすれば、神様が必ず見てくれるんです。私は無宗教です。運命論者でもありませんが、努力する者、前向きな者は必ず何らかの形で報われます。人の悪口を言ったりネガティブなことを考えていると、良いことがみんな逃げて行って自分を貶めるだけです。ポジティブに自分の信じる道を進んで、みんなが幸せになってくれれば良いな、と最近強く思っています」

——本日はありがとうございました。さらなる飛躍に期待しています。

■札幌心臓血管クリニック

札幌市東区北49条東16丁目8-1
☎011-784-7847